



おわりに

「愛着障害について正しく理解し、支援に活かしていただきたい」

この思いを常に意識しながら現場を駆けずりまわらせていただけてきたことを、二〇一八年に『やさしくわかる！愛着障害 理解を深め、支援の基本を押さえる』（ほんの森出版）という本で世に問いました。この本が好評をもって受け入れられ、翌年には『月刊学校教育相談』に「事例でわかる！愛着障害」を連載（二〇一九年四月号～二〇二〇年三月号）させていただきました。その原稿をベースに加筆修正して完成したのが本書です。

現場で出会った事例を紹介しながら、詳しい支援のあり方や、実践の中で意識していただきたいことを、こうしてまた一冊の本にまとめられることに、改めて深い感慨を覚えております。

支援は支援者の思いだけでは成功しません。こどもの思いに気づくだけでも成功しません。こどもの思いをどのように受け止め、どのようににかかわり、どのように満たすかがポイントになります。

このように考えると、愛着の問題への支援は、こどもとかわるすべての人たちが意識していく必要がある、大切な原点に気づかせてくれます。

本書では、私が出会った多くの子どもたちや、一緒にかかわってくださった支援者の方々とともに感じ取った、この「生の思い」を「事例でわかる」という形で訴えることができたのではないかと考えています。このことこそ、私が常に現場に赴き、現場を大切にしてきた専門家としてできる一番のことだと思っております。精神医学や心理学の専門家の中には、まだ愛着障害を正しく理解しようとしない人がたくさんいます。そのような人たちは、現場に足を運び、子どもを直接理解しようとしていないのではと思えるのです。

現場に寄り添う支援、現場で構築された理論、実践は常に変化していきます。私自身も試行錯誤しながら、常によりこどもに寄り添う支援とは何かを追究してきました。たえず進化していく支援だからこそ、こどもの実態に寄り添えるのです。ですから、本書で感じていたいただきたいのは、その支援の「息づかい」です。支援によってこどもが受け止める感じ方を、こどもと同じ息づかいで感じていただくこと、それこそが支援が成功する最大のポイントだと思います。

本書は、そうした現場の息づかいが吹き込まれた、現場ですぐに使っていただける内容となっていると思います。この本が媒介となって、「愛着の絆」がいっぱいつくられ、修復されることにつながっていくならば、これに勝る喜びはありません。そう念じながら、また、いつもの現場、新たな現場に足を運び続けたいと思っております。

二〇二〇年四月

米澤 好史